

日本イエナプラン教育協会



ニュースレター Vol.2 2010.12月号

発行元：日本イエナプラン教育協会

編集：山崎那菜

住所：〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL：070-5559-0361 FAX：03-3466-3439

HP：<http://www.japanenaplan.org/>

mail：Info@japanenaplan.org

今年も残すところ後わずかですね。2011年もイエナプラン教育を広める活動を、みなさんと広めていきたいと思っています。一緒に素敵な年にしていきましょう！どうぞよろしくお願いいたします。

第2回

ファミリー(根幹)グループのこと

～～文化の継承と文化の変革を学ぶ場～～

リヒテルズ直子

2007年に、オランダからイエナプランの専門家として、ヒュバートさんやフレークさんと一緒に日本を訪れたリンさん。彼は、ロッテルダム市近郊のバレンドレヒト市にあるドクター・スハエプマン小学校という、カトリック系のイエナプラン校の校長先生です。地域でも人気のこの小学校には入学希望者の数が多く、校舎が3か所に分かれていて、各分校では、若い女の先生たちが、分校長として教職員のチーム作りにあたっています。日本からイエナプラン教育を見にこられる方たちを、私はよくこの学校にご案内します。

スース・フロイデンタールに率いられてオランダでイエナプラン教育が勢い良く育っていった70年代に比べると、現在のオランダのイエナプラン校では、当時、若くて変革の意欲に燃えていた先生方も退職してしまい、教員たちが2世代目に代替わりし、初期の熱情に燃えた先生方は段々に少なくなっています。もっとも、イエナプラン教育のさまざまなアイデアは、モンテソーリやダルトンなどと共に、一般の学校にもかなり普及しており、教員たちにとっても保護者たちにとっても当時ほどに目立つ特別なものではなくなっているという面もあります。

そんな中でリンさんの学校は、彼の気概に支えられ、今も、イエナプランの理想の姿、学び続ける共同体を目指した、とても素敵な学校です。

ドクター・スハエプマン校のグループ1とグループ2の異年齢学級、つまり、4-6歳児がいる幼児クラスに行ってみると、どの教室にも、子どもたちがサークルになって座る場所に、高さの違う切り株が円形に並べられているのに気がきます。切り株は子どもたちがサークル対話の時に座る椅子です。

よく見ると、切り株の切り口に、マジックインキで子どもの名前が書かれています。名前は一つだけではありません。そのクラスに以前いた、そして、今はそこを出て上級生になっている子や、卒業してしまった子どもの名前が残されているのです。今座っている子どもたちは、休み時間や遠足、催し物の時などに、自分が使っている切り株に名前が書かれた上級生と出会い、なんだか、兄弟姉妹のような同朋意識を持つようです。



幼児クラスには切り株の椅子が、、、

イエナプランで『根幹』グループ、英語に直せばファミリーグループと言われているクラスには、いつも同じ先生がいます。先生とは呼ばず、グループリーダーと呼ばれています。何か特別の事情でもない限り、グループリーダーは、その教室の担当者として何年もそこに来る子どもたちの指導をします。ファミリーグループには『ドルフィン』だとか『きのこ』だとかの名前がついています。教室には壁にかかった時間割表や飾り付けに、教室の名前を象徴したものが使われています。そして、毎年、新しく年少の子どもたちが入ってくるたびに、そこに前からいた子どもたちと一緒に、グループリーダーに見守られながら相談して、教室の飾り付けを替えたり、物の配置を替えたりするのです。教室の中のルールも、新しい子どもたちと一緒に、新しいファミリーグループで一緒に見直します。



カバウター(小人たち)と名付けられた教室で

ファミリーグループの主人公は、子どもたち自身なのです。その教室をどんなふうに快適なものにしていくのか、その教室で大半の時間を過ごす自分たちが、お互いに気持ちよく過ごせるにはどうしたらよいか、を考えるのは、先生ではなく、子どもたち自身です。



ドラゴンクラスにあるアクティビティを選ぶためのボード

こういう経験は、文化の継承と文化の変革とを同時に学ぶことにほかなりません。

ところで、私がオランダの教育について日本で書いたり話したりしていると、たまに

「でも、日本はオランダとは文化が違いますから」

と言われることがあります。確かにその通りです。私自身も、オランダにあるものを日本にそのまま移植することができるなどとは思っていません。オランダのことを紹介するのは、それによって、日本の事情だけしか知らない時よりも、日本の持っているものの良さや悪さがもっとはつきり見えるからです。そして、日本という社会が向かっていくべき道は何なのかがより明らかになると思うからです。

「文化」とは英語ではCultureといいます。これは、Nature(自然)と対語にしてみることでできる言葉です。

Natureは、元来、土から生まれたもの、というような意味で、生まれたまま、そこにあるがままという意味、これに対して、Cultureは、人間がそういう自然環境に対して働きかけて、快適に生きていくことができるために作り出した知恵(知識や技術の蓄積)のようなものを意味しています。つまり「文化」とは、それぞれの土地の独特の自然環境に生きる人たちが、その与えられた環境の利点を利用し、難しさと闘いながら生きていくことができるように知恵を集めた結果なのです。

人類を取り巻く環境は、どこでも時々刻々と変わっています。環境破壊という深刻なものではなくても、人が生きる環境は、すでにある技術やすでに人間が働き掛けて変えてしまったコトやモノによっても、過去の状況とは変わっています。ですから、文化とは、いつも、その時その時の条件に合わせて、人間が自分の頭を働かせ、みんなで生きやすくなるために絶えず修正しより良いものに変えていかななくてはならない「知恵」なのです。

だから私は、「日本は文化が違いますから」というのは、怠慢な言い訳に過ぎないと思います。過去の人々が工夫しながら生きてきたのと同じように、わたしたちもまた新しい時代の新しい条件のもとで工夫しながら生きていく。時代の変化と共に、新しい環境条件の中で、人々が生きる仕組みを工夫し改善していくことそのものが「文化」的な活動です。

そういうふうに私が考えるようになったのはイエナプランのおかげです。自分が過ごす場所に対して何らかの責任を引き受けること、自分たちの力で快適な場と社会を築くこと、そして、新たな問題に対して、目をつぶったり他人任せにしたりするのではなく、みずから「変革者」として責任を持って社会にかかわること、私が願っているのは、そういう若い人たちがたくさんたくましく育っていく場が日本にもたくさん作られることです。

毎号のニュースレターでは、日本でイエナプラン教育を試みようとしている皆さんに役立ちそうなオランダの記事を原著者のお許しを頂いて翻訳してお届けします。第1回目のシリーズは、オランダで協働ゲームの普及の仕事をしているアナマイケ・ファンハルテンさんが執筆した記事です。アナマイケさんはこの10月に日本を訪れいくつかの保育園でワークショップをし好評を博しました。来年6月ごろにも、シェアリング・ネイチャーの会合に参加するために来日を希望しておられます。うまく都合がつけば日本イエナプラン協会でもワークショップが開催できるかもしれませんね。

翻訳記事シリーズ

シリーズ1 協働ゲーム

(アナマイケ・ファンハルテン)

訳:リヒテルズ直子

第2回 協働ゲーム アナマイケ・ファンハルテン
原著: Anne Mijke van Harten, Samen Vieren, Mensenkinderen [1] 109 November 2007

対話、遊び、仕事(学び)、催し。この4つの基本活動は子どもたちが他の子どもと共に能動的にかかわるものです。4つの記事から成るこのシリーズは、クラスの担任教員(グループリーダー)がこれらの基本活動の中で協働ゲームをどのように使うことができるか、それによって子どもたちの協働をどう高めていけるかについての役に立つ話を網羅したものです。

一緒に祝う

パーティ?!

今日はクラスでアベルの誕生日のお祝いをする日です。アベルはみんなにお菓子を配り、バースデーハットをかぶって学校中のクラスを訪問します。お祝いにみんなでいくつかのゲームをします。アベルの大好きな椅子取りゲームもやります。でも、間もなくアベルはむくれた顔をして隅に座り込んでしまいました。アベルは椅子を取り損ねて座る椅子がなくなってしまいました。

もうみんなと一緒に遊ばせん。せつかくの誕生日だというのに。

催しの時間に子どもたちは、より大きな全体の中の一部であるという感情を持ちます。より大きな全体というのは、クラスメート全体のことだったり、学年全体のことだったり、学校全体、あるいは、保護者までを含む大きな学校共同体だったりします。みんなで一緒に何かを祝うことで、子どもたちは、「私たちは共同体を成しておりみんなその共同体に属しているのだ」ということを実体験します。それは、仲間がお互いの存在を喜び、お互いに一緒になって楽しむためのものです。催しを通して、子どもたちは結合の感情を発達させるのです。そういう催し(お祝い)の時間に競争的な要素、つまり、ある子は勝つことができるのだけれども、ほかの子どもたちは落ちこぼれてもう一緒に何かをすることができなくなるというようなものを持ち込むのは目的に反しているのではないのでしょうか。私たちは、催しを通して、結合意識を生もうとしているにもかかわらず、競争は人と人との間に相違を生み出す。

催しはお祝いなどのパーティであると同時に遊びの時間でもあります。催しとして協働ゲームをやると結合感情を呼び起こすことができます。結合感情はまた、催しの時に協働ゲームをすることによって、一層強まります。そういうゲームの一例が、協働の椅子取りゲームです。椅子は一つずつ取り除かれていくのですが、どの子どももみんな遊びに加わり続けます。子どもたちはお互いに助け合ってどの子にも残った椅子のどこかに場所が得られるように工夫するのです。

[1] Mensenkinderenはオランダイエナプラン教育協会(Nederlandse Jenaplan Vereniging, NJPV)の機関誌です。

何かに属することは自尊感情を強める

協働ゲームでは誰一人として落ちこぼれることがありません。どの子どもゲームに加わりみんなの力が共通の目標を達成するために一つに集められます。お互いに対立してではなく一緒になって遊びに加わります。ここではどの子どもも価値のある存在です。どの子どもも、自分の持っている力の大小にかかわらず一緒に遊ぶことができます。協働ゲームでは、子どもたちは、あるがままでみんなの仲間に加わることを経験します。何かに属するという感情は、良い意味での自尊感情を育てることに役立ちます。そして、良い意味での自尊感情は結果的に、よりよく学ぶことができるための条件でもあるのです。

「一緒にいる」ということを祝う素敵な方法として、食事を一緒に企画するというやり方があります。

ホーホヘーンにあるクルレヴァール・イエナプラン小学校で、私たちは協働の食事を企画しました。どの子どももみな家から何かを持ち寄ります。きれいに飾りつけをしたテーブルにみんなが持ち寄ったものを並べると大きな驚きになります。テーブルの上にはどんなものが並んでいるかな? 何か足りないものは? あるクラスではたくさんのパンが持ち寄られましたが、パンにつけるものが足りませんでした。ほかのクラスでは、自分たちでパンにつけられるものをいっぱい作っていました。クラス同士でものを交換して、お互いに必要なものを満たすことができました。

自分が何かを祝う

協働ゲームは自尊感情を育てます。自分は誰なのか、ということをお祝いのです。このテーマでは、それぞれ学年グループごとにゲームの形式が少し変わります。自分が誰かを祝う、というのは、学校のテーマとしても使えます。

低学年グループ(4-6歳): パールンのモンティニ・イエナプラン小学校ではある子どもがサークルの途中で突然泣き出してしまいました。この子は泣きながら、「私には友達が誰もいない」というのです。それに対して、他の子どもたちは、いろいろな優しい言葉をかけ始めました。それから、クラス担任の先生は、それぞれの子の心に残っているすべての思い出をしまっておく小さな箱についてのお話をしました。そして、子どもたちは自分たちの「優しい言葉ボックス」を作ったのです。

中学年グループ(6-9歳): 「みんなで分け合う10の事柄」という遊びです。5人ずつくらいのグループを作り、それぞれ、みんなで楽しいと思うことを10ずつ探します。たとえば、誰かが、水泳、といいます。グループの子どもたちがみんな「楽しいこと」だと思ったら、指を一本折ります。両手の指が全部折れたら、10個ものことをみんなで分かち合えるということをお祝いします。みんなで一緒に「やったー」といってもいいし、「わーい」といってもいいですし。

高学年グループ(9-12才): それぞれの子どもは紙が厚紙を一枚背中に貼り付けます。子どもたちは、その子についてよいこと、素敵なこと、面白いことなどを考えて背中の紙に書き込みます。先生は、どの子どもも背中の紙に言葉が書かれるように気をつけます。こういうアクティビティをやることによって子どもたちは、お互いにもう少し良く知りあえるようになります。こういう遊びは、例えばキャンプに行ったときとか、中学校に進学する前のお別れパーティなどにもってこいです。ポジティブなコメントは次のステップを踏む際に自信を与えます。紙に書き込むマジックで服が汚れてしまわないように気をつけて。

教育的なフィードバックとしての催し

催しは共同体感情やコミュニケーションスキルを向上させるためにも有効です。ペーターセンは催しという重要な要素を教育的なフィードバックとして協調しています。例えば、すべての子どもたちに、催しの際に、この一年(または半年)の中で一番楽しかったのはいつか、と聞きます。どんなことを子どもたちはきれいとか、面白いとか、素敵だとか感じたのか、そして何より、どうして、そう感じたのか。催しの中でこういう問いかけをすることは、子どもたちから直接フィードバックを得る方法です。子どもたちは催しをどのように経験しているのか、何かもっとよりよくすべきところがあるのではないのか、……。

一緒にハート・ウォールを作ることで、子どもと大人とが感情を共有し、それをお互いに見せ合う場になります。学校にいるすべての子どもたちとすべての大人たちに、催しの中で何か特別の瞬間と感じられた時のこ

とを絵やコラージュとして表現し、これを一定の場所に張り付けてみんなが見えるようにするのです。他の人が催しをどのように経験しているのかを見たり聞いたり経験したりすることができると、共同体生活は豊かになります。いろいろな催しの時の写真をきれいに貼り付け、額縁をつけるなどして、定期的に新しいものと取り換え、子どもたちがそれを見る場所を決めておくと、共同体生活が生き生きとしたものとなり、子どもたちがそれについていろいろと語り続けるようになります。催しは、生と学びの共同体の中での共同生活の一部なのです。

めぐる一年

催しは、一日、一週間、一年というような時間のリズムの中でも大変大きな役割を果たします。一年間を通じてそれはそれはたくさんの催しが行われます。たとえば、子どもたちや先生の誕生日、祝日、宗教行事の日、記念日など。また、自分たちで考案したパーティの日を祝うことでも大きな帰属感情を生みます。ふと思いついてパーティをしたりすると、毎日の退屈なリズムにブレークスルー

を与え、新しい結合感情を生みだし、エネルギーがわいてきます。

私は、8才の時に、朝食をとっている食卓で秋祭りのお祝いの日を決めた日のことを忘れることができませぬ。わたしたちは、色づいた美しい秋の木の葉、栗の実、ドングリの実を集め、招待状を書いて、おいしいものを作りました。その日の午後、近所の人たちをたくさん集めてパーティをしました。いろいろな瞬間を見つけて子どもたちとそれを楽しんでみてはどうでしょう。小さい子ども大きな大人も一緒になって。何かを学ぶのにたくさん時間をかけて努力しなければできなかった子がとうとうそれをマスターした時など、パーティをするにはもってこいです。そんな風に考えれば、どの日もみんな何かお祝いのできる日であるはずです。

アナマイケ・ファンハルテンはアースゲームの設置者で、ハート・フォーカスのトレーナー。協働ゲームの分野でワークショップをし、子どもたちの行動にポジティブな影響を与え発達を促すゲームを創作し、提供している。

日本イエナプラン学級物語

「転入生ヒロシが学ぶ！」

狭山市立柏原小学校教諭 伊垣尚人

第1話「親友ナオキとの出会い」

僕の名前は甲斐ヒロシ。狭山市立柏原小学校5年2組に新しくやってきた転入生だ。

「新しい転入生がやって来ました。ククリ坊主頭のヒロシなんだ。ボクたちのクラスのこと、ていねいに教えてあげてくださいね」

担任のイガ先がボクのことを紹介してくれた。担任の先生はさわやかさが売りの伊垣先生だ。先生は自分の名前を「イガせんと呼んでくれ！」ってかっこよく自己紹介をしてくれた。

そんなイガせん連れられてやってきた5年2組の教室。僕はかなり緊張して教室に入ると、なんだか僕の知っている教室の様子とは少し違っているようだった。

とまどっているボクに声をかけてくれたのが、人なつっこそうな顔をしている背高ノッポの男子。

「僕はナオキ。今週1週間、君にクラスのことを教える係なんだ。よろしくね。君のことヒロシって呼んでもいいかい？」

人なつっこい笑顔にボクもぎこちなく笑顔を返してみ、握手をしようとすると

「ちがう、ちがう、ボクたちのクラスはハイタッチをするんだ！」

といって、にっこり笑ってボクの手のひらをパシッと叩いた。

ボクはじんわりと残る温かい手を見つめ、なんだかワクワク

した気分です。スタートできそうな気がした。

第2話「教室リフォームでオーナーシップをもつ」

ボクが感じていた違和感。それは、教室の机の配置だ。フツー、みんな先生の方を向いているはずなのに、このクラスときたらなんだかグループごとに別れて座っている。

しかも、教室の真ん中に広いスペースがあって、休み時間の今、数人の男子と女子が楽しそうに遊んでいる「どうして？」

ボクはナオキにきいてみた。

すると

「ああ、この教室いいだろう。ボクたちのクラスは自分たちで自分の教室をリフォームするのさ」

嬉しそうにナオキが話をしてくれた。

えっ！？だって、教室の机ってみんな黒板を向いているのがフツーなはずなのにどうして？

ボクは、少しとまどっていると、ナオキが手を引いて教室の隅に連れて行ってくれた。

「この掲示物のポスターはボクがつくったんだ。すごいだろ。」



教室リピングループ計画(教室リフォーム)

ボクはがさつな字で書かれた「クリスマスパーティーのお知らせ」をざっとながめた。

何がすごいんだろう？

よく見ると教室にはナオキのポスターだけではなく、クラスの子たちが作ったんだろうポスターやお知らせがたくさん飾ってあった。

それに、入り口には少しガタガタだけドミシンで縫った暖簾がかけてある。

暖簾には(あいさつ)とフェルトが貼ってあった。

ナオキは嬉しそうに

「みーんな、自分たちでつくっちゃうんだぜ。」

それに、机の配置も席順もロッカーも下駄箱も全部自分たちで決めるんだぜ。

この間なんか、話し合った結果、先生の机なんか後ろに行っちゃったんだ。

でも、イガ先は怒らない。

ボクたちが教室の主役になる方が大事だって言うんだ。だってさ、教室の主役はボクたち子どもだろ。

先生じゃないんだ。

先生はもちろんボクたちのことを助けてくれたりするけど、ボクたち自身がしっかりとこの教室を創っていく気持ちが大切なんだぜ。

だから、いつでもみんなと相談したり、話し合ったりしやすいように机はグループで集まっているし、教室の真ん中にはみんなとサークルになれるようになってるんだ」

ボクは思わず

「教室の真ん中でサークルになるだって!？」

と声を出してしまった。

「じゃあ、順を追っていいいに紹介するね。」

ナオキはそう言うと、クラスのみんなに

「おーい、みんなー！ヒロシのためにサークル対話しようぜ!」

と声をかけ、みんなが一斉に教室の真ん中に腰を下ろし始めた。

第3話「安心の場づくりサークル対話」

教室の真ん中にみんなが話になって座っている。

よく見るとイガ先も輪の中には入っている。

輪は多少デコボコしているようだが、みんな何だか嬉しそうに顔を見合わせている。

ナオキが

「簡単に自己紹介しようぜ」

そう言って、クラスのみんなは一人ずつボクの方を向いてニックネームと特技や好きなテレビやゲームのことなど教えてくれた。

なんだ、みんな僕と同じくTVもゲームも好きなんじゃない。

僕はおそろおそろ自己紹介をすると、クラスのみんなが僕の方を見て拍手をしてくれた。

ふと気づくと、輪になってからなんだか安心してボクがいた。

さっきまでの緊張感はなんだったんだろう。

みんなの顔が見えるからかなあ。

「ボクたちはね、みんなと話し合いが必要なときはこうやってすぐに輪になって話し合うんだ。

もちろんケンカしたときも、いろんなクラスの計画を立てるときもね」



サークル対話

自慢げに話すナオキの横から

「目線が同じ高さになるからさ、誰もエライ奴とかいなくなってみんな平等なんだよ」

アヤが口を出してきた。

「私はアヤ。この輪はサークル対話って言って、私たちのクラスは毎朝、輪になって始まるんだ。

朝の会では、隣の人とペアでお話ししたり、全体で発表したりして一日が始まるの。

こうやってひとりひとりを大事にして聴き合うってことが大切なの」

「そうそう！でもさあ、たまに調子に乗ってふざけたりするとボクはアヤに注意されるんだけどね」

ナオキがそう言うと、みんながどっと笑った。

なんだか、笑い声も、みんなの顔が見えたりするのでとても近くに感じられて温かい気持ちになれる。

僕の前の学校では朝の会は日直のスピーチだったり、先生からのお説教からスタートだったなあ。

こんなふうによったりとして一日が始まるならいいなあ。ボクがしばらく逡巡しているとイガ先に

「さあ、じゃあ次はブロックアワーのワクワクタイムだね。みんな、よろしくね」

そういって、ニコニコしてイガ先は教室の後ろにある自分の机に戻って行ってしまった。

第4話「ブロックアワー」

イガ先の合図と同時にクラスのみんなが一斉に席に戻って、机の中から1枚のカードを取り出してじっくり見ている。

「何してるの？」

真剣にカードを見ているナオキにおそろおそろ尋ねてみた。

「これはね、自分の課題にあった学習を一人一人が真剣に取り組む時間なんだ。しかも、2時間ぶっ続けなんだぜ。でもあつというまさ。」

「ねえナオキそれじゃあ、ヒロシに全然伝わらないでしょ！もう」

アヤはなんだか怒りながらも親切にボクにブロックアワーのことを説明してくれた。

アヤが言うには、学習スピードはひとりひとり違うから、みんなが一齐に同じ学習をするんじゃなくて、自分にあった学習内容を自分で選らびながら学ぶ時間らしい。時間割を自分たちで考える学習なんて驚きだなあ。学習内容は先生から色々提案があるようだけど、それを元に自分でまず計画書を書いてみるみたいだ。途中途中、イガ先と相談しながら進めるらしい。

一人一人課題が違うけど、分からない所は近くの人や友だちに相談してもいい。

これなら緊張しながら先生に分からないことを聞くよりも、安心して友だちなら聞ける。

教室の様子をよく見ると、算数ドリルや算数プリントをやっている子がいる。

その隣で、漢字のテストをやっている子。

社会のテストの復習をしている子もいる。

読書しながら、読書記録みたいなのを付けている子。こりや大変だぞ、自分でしっかりやることを目標もってやらないと。

今までのように、先生の話を上の方で聞いているふりをしていないわけにはいかないようだ。



ブロックアワー

どうも、学びに対して責任があるみたいだなあ。

イガ先は何しているんだろう。きよるきよる探してみたら、ひとりひとりの席の横に行って色々アドバイスやヒントをあげているみたいだ。

全員に説明はしないけど、ひとりひとりにあったペースで教えているんだな。

なんでも、この1週間のブロックアワーは「今までやったテスト、全部100点にしちやおうキャンペーン」らしく、

今、みんなは、せっせとプリントに取り組んでいるみたいだ。

すでに課題が終わっている人は友だちへ教えに行ったり、読書をしたりしているらしい。

うーん。おもしろそうだ。

ボクはさっそく、自分でなにをやるかを考え始めてみた。算数の三角形の面積がよく分からなかったから、その復習をしようかなあ。

ドリルを計画書に書いてみてと。

「うんうん、その調子！」

ナオキが嬉しそうにこつちをのぞいている。ナオキは顔に似合わず頭がいいみたいで、もう課題は全部終わっているようだ。

そして、本を読みながら、僕のことを気にかけてくれて

いる。

さて、僕もやってみよう。

イガ先もにっこり笑ってこつちを見ている。

なんだか、見守ってくれているような先生だなあ。

集中すると2時間はあつという間だった。

途中、何人かが静かに席を立ったけど、あれは何しているのか聞いてみるとトイレに行ってくるようだった。

このクラスではトイレは静かに行って帰ってくればいっ行ってもいいみたいだ。

もちろん基本は休み時間に行くようなんだけど。

2時間が過ぎて、イガ先が全体に話を始めた。「さあ、計画書に今日やった学習のふりかえりを書こう。できたこと、そして、次回への改善点を具体的にね」

こういう学習、初めてやったけど、ボクにとってはワクワクする時間だった。

そうか。

だからワクワクタイムっていう名前なんだ！ そう思って顔を上げると、アヤと目があつた。

アヤは近づいてくると小さな声で

「次の時間はマルチエイジの寺子屋学習よ」

えっ、まだなんかやるの？

教室の入り口をみると、大勢の1年生が目をきらきらさせながら

「おにいちゃん！」「おねえちゃん！」

と手を振って待っている。

次は何するんだろう。

ボクの心はドキドキするのと同時に、学ぶことってこんなに楽しいことなんだ。

自分で考えたり、選んだり、サポートしてくれる仲間がいるってこんなに安心なんだ。

もう、ナオキやアヤのことを身近に感じられるようになってきている。

次の4時間目が楽しみになってきた。

次回「マルチエイジ寺子屋学習へ続く」

★ご報告

「日本イエナプラン教育協会設立記念シンポジウム」福岡報告会が開催されました。



ブックスキューブリックでの様子

『カフェで語る明日の学校』

久保礼子

11月27日(土)「日本イエナプラン教育協会設立記念シンポジウム」の福岡報告会ということで開きました。

場所は、福岡市箱崎にあるブックスキューブリックという、ちょっとおしゃれな本屋の2階のカフェを使わせてもらいました。参加費はワンドリンク付きで1000円。ドリンク代400円で会場をつかわせていただくという形でした。残りの600円は、協会の活動費に。

夜7時から9時までの2時間。参加者はスタッフを含め17人でした。

1時間を久保が話し、残りの1時間をみんなで話す時間としました。レジメは以下のようです。

1. 協会設立までのあゆみ
2. イエナプランとは
～オランダで見てきた学校の様子～
3. シンポジウム報告
(1)リヒテルズ氏提言
(2)村上忠幸氏(京都教育大学)提言
(3)甲斐崎氏、伊垣氏(小学校教諭)実践報告
4. 何ができるか、何をすべきか

とてもセンスの良い落ち着いた空間で、それぞれ好きなドリンクを飲みながら、17人ぐらいの人数なので、初対面の人もとても自然体で、それぞれの立場から

意見や感想を出し合うことができました。1時間のトーク時間が足りなかつたくらいです。とてもイエナ的な時間だったと、私は感じました。

教員の参加者は私を含めて5人。発達支援クラスを担当している教員(私のもと同僚)の報告はうれしいもので、自分のクラスの運営にイエナプランを意識してあたっているというものでした。

昨年は(担任は別の教員でした)なかなか教室に入ろうとしなかつた発達障害をもつ生徒が今年は何の抵抗もなく教室にいるというのです。ブロックアワー形式で1週間のプログラムを、彼主体で立てさせたことが大きいとのこと。今日は、いったい何をさせられるのだろうかという不安(?)ストレス(?)からすっきり解放されて、自分がすべきことをわかって、すごく意欲的に学習にとりこんでいるのだそうです。また、もちろん異年齢クラスなので、その効果も彼女はじっくり観察をしているようでした。

「もっとみんなでやれたらなあ」と言うのが今の彼女の悩み。教材(生徒が自分で選び、自分でとりこんでいく)が少なく、一人で作っても間に合わないからです。そうですね。

あと、小学校に子どもを通わせいるお母さんが二人。やたらみんな一緒にと、卒にはめられることに、母子で違和感、怒りを持っていると同じ悩みを話されました。

実はわたしの教え子が二人(一人は子連れで)きてくれていました。自分の中学・高校・大学時代を振り返り、とりあえず与えられた勉強はしてきたけれど結局は社会人になって本当の勉強をしている、もっと早くに本当の勉強をすることもできたのかなあ、と感想を話してくれました。

現役で大学で学んでいる教員志望の若者が、たくさん語ってくれたのもおもしろかったです。九州の教員志望者たちのグループがあってそこでがんばっているそうです。学び合いの集まりにも参加しているそうですよ。イエナプランについて詳しく話をきいたのは初めてだったそうで、すごく刺激をうけたと感激していました。

ツイッターで中川綾さん、長尾彰さんつながりで参加された女性もいました。

福岡でもすこしずつ、つながっていける核となる場ができたかと思えます。以上報告です。



～リヒテルズ直子の質問箱～

Q: 芸術教育について伺います。

リヒテルズさんの著書『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』P132、時間割の一例にある芸術教育には、演劇や視聴覚、ダンス、文章をつくる、などいくつかのジャンルが書かれていますが、詳しい内容を教えて下さい。また、表現アートセラピーという芸術療法で、『クリエイティブ・コネクション』という、数種の表現方法を組み合わせたワークがあるのですが、ワールドオリエンテーションの考えに通じるものを感じています。イエナプランの芸術教育には様々な表現方法をまたいで行われるカリキュラムはありますか？もしあるとしたら、どのような内容なのか教えていただけると嬉しいです。

A: オランダの小学校の芸術教育は、日本に比べると、技術面での修練というよりも、表現をすること、愉しむことに重きが置かれているように思います。その理由は、技術面での進化を求める子どもたち（または保護者）は、普通、学校とは別に、放課後の時間を使って、音楽学校や美術クラブのようなものに通わせるのが伝統的な習わしだからです。これは、体育についても言えることで、スポーツに優れた子ども、スポーツに関心のある子、また、親が、健康な体作りとかスポーツを通した社会性などに関心を持っている場合には、学校とは別のスポーツクラブに通わせます。そういうわけで、学校では、小学校も中学校も、スポーツや芸術などのクラブ活動はやらないのが普通です。

それでは、学校での芸術教育の目的は何なのか、ですが、、
オランダの教育文化科学省が「中核目標」として示しているものの中で、芸術教育については、次の3つが目的として挙げられています。

第54項 生徒たちは、モノの形やイメージ、言葉、音楽、遊び、身体の動きなどお使って、感情や経験を表現し、それによってコミュニケーションすることを学ぶ。

第55項 生徒たちは自分の作品を作ることを学び、それに対して他の人からの評価を受けて見直すことを学ぶ。

第56項 生徒たちは文化遺産についての知識を得、その大切さを学ぶ。

つまり、オランダの『学校』での芸術教育は、まさに、「芸術」(術)ではなく「芸術教育」(教育)だということです。芸術の表現方法ではなくて、『表現』することの意義の方ですね。つまり、芸術を通したコミュニケーションと言ってもいいか、と思います。

以前にもいろいろなところでお伝えしていますが、オランダの「中核目標」は、目指すべき到達点、すべ

ての子どもが少なくともこれだけは到達してほしい、という「目安」として示されているものです。学校によって、理念が異なり、それによって、教育の目標・力点が異なる可能性を許容しているからです。

さて、そうするとイエナプラン校では芸術教育は学校生活や時間割の中でどう位置付けられているか、ということですが、イエナプラン校がある程度共通理解として抱いているのは、①子どもの学びは、「教科」に分断されるものではなく、子どもの経験世界から始まるもので、その意味で、ワールドオリエンテーションが学校教育の「ハート(心臓)」と、考え、芸術もワールドオリエンテーションの一部としてみなされているという点、②4つの基本活動のそれぞれとの関係がある、という点です。

まず、①ワールドオリエンテーションの一部という意味では、探求活動のきっかけとしての何かに対する関心、問いかけを引き出す際、それから、あるテーマでの学びの成果を表現するときなどに、芸術教育がかかわってくる可能性が大きいです。例えば、博物館・美術館の見学は前者の例ですし、絵や物語、演劇による表現は後者の例として使えます。②の4つの基本活動との関係は、〈対話〉: 何らかの芸術作品を媒介とした対話、〈仕事(学習)〉: 作品作り、作品についての学び、作品の評価、〈遊び〉: 作品作り、〈催し〉: 作品の発表というように理解できると思います。

ご質問の中にある、『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』132ページに示した時間割ですが、4つの活動を循環させ、子どもたちの身体的なバイオリズムに合わせて緊張とリラックスの時間を交互に設けるために、芸術教育や体育をできるだけバランスよく全体に散らばらせるようにしています。また、算数や読みなど、頭を使って集中しなければならない活動は、まだつかれていない午前中に設定するのが普通です。

このページに挙げているのは「一例」にすぎません。実際には、芸術教育とされている時間帯は、その時期、ワールドオリエンテーションで取り上げているテーマに沿って作品作りをしたり、週末の催し(普通、毎週、当番のグループがある)のために演劇や詩の発表、歌などの準備をしたり、あるいは、学校によっては、週に1度ずつ、芸術活動を選択的に選べるようにして、お父さんやお母さんに参加してもらい、芸術指導、編み物、その他の活動をクラブ的に選択して、いつもとは異なるグループの仲間と一緒に学習する時間を設けている場合もあります。こういうやり方は、ペーターセンのイエナ大学での実験校の頃からのもので、奥さんのエルゼ・ペーターセンは、特にイエナプラン教育での芸術教育のやり方についていろいろな研究的な試みをしています。

ご質問にはまた『クリエイティブ・コネクション』のことが書かれていますが、私は、それについて詳しく知りません。ただ、言葉の意味をそのまま理解すれば、「創造的な結合」ということで、最初に挙げた「中核目標」が意図するところに近いものを感じます。日本の芸術教育が、とすれば、陥りがちな、工芸品のような洗練された技術を深めるあまりに、芸術が、表現の媒体であるということを忘れてしまう、という問題の、対極にあるもののように思います。それは、たとえば、日本の学芸会が、保護者に「いかに素晴らしいものを見せるか」に目標を置きすぎ、子どもたちが表現したいと思っているものは何なのか、子どもたちがどれくらい芸術を通

してコミュニケーションする力を発達させているかを見せる場にはなっていない、ことにも関係があると思います。

私が訪れたある学校では、[特別支援]の一部として、自閉症やアスペルガー症候群の「問題発見」や「治療」的な意味合いで、壁に貼りつけた大きな模造紙に、身体を大きく動かしながら絵を書かせるという活動をやっていました。
(以上)



★リヒテルズ直子さんへの質問募集

イエナプラン教育やオランダについて、リヒテルズさんに直接たずねてみたいことはありませんか？

皆さまへの回答は、ニュースレター～リヒテルズ直子の質問箱～に毎月掲載いたします。

ご質問のある方は、件名に「ニュースレター質問箱」とお書きの上 info@japanjenaplan.org

までお送り下さい。

紙面の都合上、いただいたご質問はこちらでおまとめし、毎月1～2件ずつ掲載しますことをご了承下さい。

皆さまのご質問をお待ちしております。



★各支部のご案内

東京支部 info@japanjenaplan.org

千葉支部 chiba@japanjenaplan.org

埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org

京都支部 kyoto@japanjenaplan.org

福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org

★ニュースレター12月号はいかがでしたでしょうか？ぜひ皆様のご意見、ご感想をお寄せ下さい。下記アドレスまで、メールでお願いいたします。

info@japanjenaplan.org

★伊垣先生のコラム『日本イエナプラン学級物語』の続編も楽しみですね～不定期連載とのことなので、続きをドキドキしながら待っています☆

★それでは、よいお年をお迎え下さい。私はうさぎのようにジャンプしながら、新しいことに挑戦したいと思っています！

(編集山崎)